

マタイ福音書講話（8）

マタイ 4章 12～17節【ガリラヤで伝道を始める】

12～13節「イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。」ヨハネが捕らえられたとは、ヨハネの時代が終わったという意味である。ここからイエス様が活動を始められる。律法の時代が終わって、福音が働き始める。律法の役目は、私たちに自分の病と罪を教えることである。罪の自覚、病の自覚を持たせることにある。あなたは人間からずれており、死んでいるということを教える。そして医者であるキリストの元へ行くように私たちに導く。病や失敗や罪があったのでみんな教会に来たのだ。あなたが医者の所に来たのは治療する為である。命の薬をつけてもらおう。しかし自分が罪人、死人、病人であることを忘れた時には、再び律法を聞こう。このように律法を読む読み方に気をつけなければならない。年がら年中、健康診断を受けるような馬鹿はいない。せいぜい年に数回でいい。自分の罪や醜さ、汚れて悩みくよくよする人は、毎日健康診断を受ける人に似ている。そんな暇があったら、さっさとイエス様の所に行って、福音という薬を耳で飲み、聖体・聖血という解毒剤を口で飲む方がいい。

14～16節「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。『ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。』」これはイザヤ 9章 1節からの引用である。イエス様はカファルナウムを伝道の拠点地とした。カファルナウムは外国に近いので、新しいことを常に取り入れてゆく町であった。そうしなければ生きていけなかったからである。守りではなく、改革の町であった。都島教会と同じだ。そういう所でこそ福音は根づき、神は働いて下さる。エルサレムの大都会に住む民は、安泰の生活を送っており、自分が変わらなくても生きていけた。周りにいる人たちにいつも「自分たちに会わせろ」と思っていたであろう。自分たちこそ本道、政治・文化の中心、正統派と自負していたであろう。彼らから見たらカファルナウムなどは異端であり、混乱と無秩序の町であった。それは「暗闇の地、死の陰の地」であった。しかしそこにこそ神の光は昇り、照らしていたのである。闇こそ光である神を最も必要としているからである。

イスラエルの国を一人の人間の体だと思ってみよう。エルサレムが頭としたら、ガリラヤはどこだろうか。エルサレムが富と名誉と栄光と繁栄と学歴の場所なら、ガリラヤとは異邦人の土地といわれた場所、最低の場所、貧しさと弱さと

恥と無知と罪が現れてしまった場所である。その最も低い場所で、最も人間の
本質が現れた場所で、キリストは語り、働かれる。だから人は傷ついた時、悲
しんでいる時ほど、神の声が入る。

17 節「そのときから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、
宣べ伝え始められた。」「天の国」とは「神の支配、天の支配」という意味であ
る。原語では同じバシレイア、バシレイオスという単語を使っている。私たち
は「天の国は近づいた」と聞くと、地上にユートピア（理想郷）ができると思
ってしまうが、そういうことではない。実は神の国とはイエス様自身をさすの
である。イエス様を受け入れることによって、あなたの心の中に神の国ができ
るのである。あなたの夢の国ではない。神の思い、神の御心になる国である。
キリストの思いがあなたの心を支配した時、あなたの中に神の国が生まれるの
である。

「悔い改めて」とある。原語は「方向を変えろ」という意味である。キリスト
の到来は神の国の到来である。彼はその王国の王なのである。真の王の到来に
より、この世の偽りの王の支配は終わる。新しい国がやってきたのである。あ
なたもこの王国に入りなさい、というのが悔い改めである。キリストを受け入
れ、神の国を受け入れ、そこの住人としての生活を始めることを悔い改めとい
う。古い国にいるままで、いくら懺悔をし、改心しても悔い改めとはいわない。
神の国に入るためには、自分の考えとか今までの常識というものを全く捨てな
ければならない。それが悔い改めである。

人間というのは、自分が欲しいものは受け入れるが、神が与えるものを素直に
受け入れることができないものである。三浦綾子さんがこのようなことを言っ
ておられた。人間は天国を望みながら、自らそれを拒絶している。平安を求め
ながら、神が与える平安を追い出し、自分の力で平安を得ようとしている。天
国とは自分の力で入るところではなく、神によって入れてもらうところなので
ある。

マタイ 4 章 18～22 節【四人の漁師を弟子にする】

18 節「イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペ
トロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧に
なった。彼らは漁師だった。」

聖書を読むときは、想像力を働かせることだ。今日の場面を頭の中で想像して
みよう。イエス様はガリラヤ湖のほとりを歩いておられる。弟子の召命はまず
湖で行われた。ガリラヤ湖は紅海の物語を思い出させる。神は私たちが奴隷状
態から自由へと招かれる。また、湖は天地創造の水を思い起こさせる。神の声

が人を招かれる。新しい創造への招きである。その昔、神はエデンの園を歩まれた。今、神は人となってこの地を歩まれる。その昔、神が古いアダムを呼ばれたように、神の子イエスは、この世の岸边というエデンを歩き、新しいアダムを呼ばれる。この世という湖を神の言葉によって漕ぎ出し、天国という向こう岸に渡る者を捜しておられる。

●シモン（ペトロ）とアンデレは湖で網を打って漁をしていた。ヤコブとヨハネは舟の中で網の手入れをしていた。イエス様はどちらも二人セットで招かれる。「二人はすぐに」（20 節）、「この二人もすぐに」（22 節）と二人という言葉が繰り返される。イエス様は人を新しい兄弟の交わりの中へと呼ばれる。人は一人で生きるのではない。単に肉の血（家族、兄弟、親戚）のつながりではなく、神に呼ばれた者同士としての兄弟である。

●「湖で網を打っているのを御覧になった」ごく普通の日常生活の中で神は人を見ておられる。イエス様はどのような眼差しで彼らを見ていたのだろうか。まず神が人間を見る。その視線に気がつき、人間は呼ばれて応答してゆく。始まりはいつも神である。どんな宗教でも人間が神を捜し求める。しかしキリスト教は神の方が人間を捜し求めている。

19 節「イエスは『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。」「従う」というのは神の招きに対する人間の応答である。神の言葉を自分に言われた言葉として聞かなければ、従うということは起きない。神の言葉を他人事として聞いたりしていたら信仰は起きない。だから想像力が必要だ。

「従う」ことは年々少しずつ深くなってゆく。「わたしについて来なさい。」と主は今日も私に言われる。イエス様についてゆこう。救いとはそれだけだ。何があっても、どこまでもイエス様を信頼してついてゆくこと。それが救いである。また、それが、人間が完成される唯一の道である。イエス様についていたら人間をとる漁師になるのだ。自分の力でなるのではない。イエス様が「しよう」といってくださるのだから、イエス様がしてくださる。人間にできることはついてゆくことである。どこまでもついてゆくことだ。何があっても、ついてゆくことだ。

●「どこまでも主に信頼せよ」（イザヤ 26 : 4）

20 節「二人はすぐに網を捨てて従った。」

具体的にキリストに従う（ついてゆく）とはどうすることだろう。彼らは生活の道具である網を捨てて従った。彼らにとって網とは、自分の手足のようなもの、最も慣れた道具である。それを捨てることは、自分の経験や知恵や判断を捨てることだ。自分で生きようとせず、キリストに一切を委ねることを意味している。神が彼らを生かしてくださるだろう。それに徹することである。これを捨てない者は、キリストの弟子ではなく、従うことにもならない。私たちは日々、

この連続である。先行きが見えない不安、いつまでも続くのではないかと思う閉塞感、さまざまな喪失体験。それらが私たちに悪い判断をさせる。そんな時、私たちに希望を与えるのは神の言葉しかない。神が語っておられるのだ。必ずそうなると信じることによって、希望を持つことができる。希望が湧けば、立ち上がり、継続することができる。絶望は私たちから立ち上がる力も活動する力も失わせ、命のエネルギーをマイナスのこのために消費させる。だから、自分の経験や知恵や判断を捨てるのだ。自分の経験や知恵や判断ではとても無理だけれど、神が言われるのだからやってみようという気になるのである。従うとはそういうことだ。自分というものを捨て、神の言葉を取るのだ。

21 節「そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。」

今度の二人は、漁を終わって網の手入れをしていた。網の手入れとは、網の補修である。繕いである。破れてしまったものを自分で繕っていたのだ。しかし、人間は自分の人生の破れ（失敗、過ち）を、自分で繕うことはできない。ユダは自分の失敗を自分で繕おうとした。すなわち自殺したのだ。自殺をして自分の失敗の穴埋めにしようとした。しかしそれは彼に滅びを与えた。キリストに繕ってもらうのだ。そのためにキリストの体が裂かれて、あなたの破れにあてられる。あなたの破れはキリストが、自らの命で繕って下さる。そしてあなたの人生が破れれば破れるほど、そこにキリストは手当てをし、自らの肉と血で繕って下さる。人間が自分の頑張りや力で繕ったものは、やがてまた破れてしまうだろう。待っているのは絶望と滅びだ。しかし、キリストに繕ってもらった者は、永遠に耐えるであろう。

22 節「この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。」

キリストに従う時に、残さなければならないものがもう一つある。これは持って行けないし、連れてはいけぬものである。それは《舟と父》である。舟は財産を表している。父は親子関係であり、社会関係である。財産はこの世だけのものであって、永遠の世界には持って行けない。それは永遠を獲得するための道具であって、命ではない。二階に登る梯子のようなものだ。多すぎても少なすぎても駄目だ。ほどほどでいい。生活ができればいいのだ。要は満足の問題だ。この世で生きる時は、キリストは心配しなくても生活に必要なものは与えらるといわれた。だから、必要なものは他から流れてくる。そしてまた他へ流せばいいのだ。流さない財産は腐る。永遠に残るものは何かを考えよう。

一方、親子関係、社会関係はどうか。それは絶対的なものではなく、完全な秩序でも無い。神と人との関係こそ第一に築かなければならないものである。この縦の関係がぐらついていて、いくら横のつながりをつくっても、人は平安が

来ない。なぜなら横の関係というものは、絶えず変化し、移り変わるものだからだ。人はどんどん変わって行くものだ。私の母教会も、29年の間に牧師が四人変わった。それと共に、教会のメンバーも変わった。人は絶対なものではない。人は流れる者、私たちの人生の中で一時的に私たちと関わり、一時的に教え、助けてくれる者にしか過ぎない。人を絶対にしてはいけない。それは悪魔の考えだ。神以外に絶対な方はいない。

日本人の宗教観というものは、情操教育、道徳性を養うためのもの、つまり自分を磨くためのものだと思っている。そしてそれによって自分が幸福になると思っている。しかし、キリスト教の宗教観は違う。それは生きている神との交わりであり、神の招きに従うことである。中心は自分ではなく神である。「わたしに従いなさい。ついて来なさい。」と招かれ、ついて行くことによって、キリストが私を変えて下さる。

●2世紀のリヨンのエイレナイオスはこういつている。「神との友情は、それを得る人に不滅性を与える。初めに神は人間を必要としたからではなく、自分の恵みを注ぎ込むその相手を得ようとしてアダムを形造られた。…主がご自分について来るようにと命じたのも、私たちからの奉仕が必要だったからではなく、私たちに救いを与えようとされたからである。救い主について行くことは、救いにあずかることであり、光について行くことは光にあずかることだからである。光のうちにある人々は、自分が光を照らし出し、輝かせるのではなく、光から照らし出され、輝かされるのであって、自分たちは光に何も与えず、光から恵みを受け、照らし出されるのである。神に従うことも同様である。…神は、仕え従う人々に、いのちと不滅性と永遠の栄光を分け与えられる。…神は完全な方であり、欠けるところがないからである。…神が何も必要とされないのとは対照的に、人は神との交わりを必要とするからである。神への奉仕を貫くこと、やめないこと、これこそ人の栄光である。」

先日、夕礼拝で説教した後、未信者の人が私に言われた。「キリスト教というのは自分の力で変わるのではなくて、神によって変えられるのですね。自分の周りのものによって変えられるということが良く分かりました。」キリストに従う、キリストについて行くことによってあなたは新しくなり、あなたはまことの人になるのである。それは始まったのである。